

## 夢野久作「死後の恋」の「宙づり」効果

畑中，佳恵  
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/15997>

---

出版情報：Comparatio. 5, pp.103-118, 2001-03-20. 九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会  
バージョン：  
権利関係：

# 夢野久作「死後の恋」の「宙づり」効果

畑中 佳恵

【はじめに】

さよう……ただきいて下されば、いいのです。そうして私がこれからお話しする恐しい「死後の恋」というものが、実際にあり得ることを認めて下されば宜しいのです。\*1

「死後の恋」\*2の語り手、自称《コルニコフ》は、彼が《あなた》と呼びかける聞き手、彼によると《日本の軍人さん》に、自分の願いは自分の話を信じてもらうことだけなのだと言いつつ訴える。これは、聞き手（作中に肉体をもつて登場しているとすればだが）、そして小説の読者に、コルニコフの《死後の恋》の物語に、真偽の判定という関心からアプローチするよう枠組みをはめる。つまり、大きな意味での受け手は、コルニコフの語る一切に対して信じるか否かの二者選択の視線を向けつつ伴走し、自らの態度決定をゴールとするよう求められているのである。小説の読者に関していえば、題名ともなっている作中物語の位置づけが、小説全体を統括すべきテーマとなることへの期待を通して一層、この経路に組み込まれることになる。

コルニコフによる《死後の恋》のエピソードが一段落した、小説の結末部に飛んでみよう。(ここでは、聞き手が作中に物理的な存在として居ると前提することにしよう。) 聞き手《あなた》は、そこに至るまでどのような伴走してきたか不明であるが、態度決定に至ったらしいことが伺える。

……ああ……本当にして下さる。信じて下さる……ありがとう。ありがとう。サアお手を……握手をさして下さい……宇宙間に於ける最高の神秘「死後の恋」の存在はやっぱり真実でした。\*3

コルニコフは聞き手から「信じる」という意志表示を受け取っているよ

うだ。が、そのお札に差し出した《宝石》は受け取られず、状況は一転する。

……エ……何故ですか……なぜお受け取りにならないのですか……。(中略) エッ……エッ……私の話が本当らしくないって……。  
／……あ……貴下もですか。……ああ……どうしよう……ま……待つて下さい。逃げないで……ま……まだお話しすることが……ま、待つて下さいッ……。\*4

《宝石》を拒み、《話が本当らしくない》と言いつつ立ち去りつつある聞き手の姿が想像される。この聞き手の立場に、二者選択を要求されている受け手として同一化し得た読者は、果たして聞き手の態度決定——一旦信じてと見せて信じないという変化を伴う——を共有することができらるだろうか。もしも作品の要求する「読者の役割」を聞き手が演じるならば、当初信じたとき、また一変して信じないとしたその理由が読者に向かつて説明されることで、両者の同一化が計られよう。しかし、ここでは二者選択を成し遂げた聞き手の思考の道筋がそれ自体も一つの解釈の対象となる。この聞き手との距離が意味するのは、《死後の恋》への対応という点においてすら、小説の読者が果たし得る「読者の役割」が、聞き手の果たしている役割とは別の場所に見出されるといふことである。

このように見てくると、聞き手が態度決定した後に、読者にはさらに真偽の判定の材料となり得る情報が与えられることを看過することはできない。聞き手の態度決定に同一化しないばかりでなく異議を申し立てることが可能となるかもしれないからだ。そして、コルニコフが《ああ……／……アナスタシヤ内親王殿下……》という言葉を発したという最後の情報を得た上でさらに、このコルニコフの言葉をパースペクティブの終着点として、その題名のもとに統括される小説「死後の恋」に対することになる読者は、どのような役割を果たすことが期待されるのか。これが考察の出発点となる。

本稿は、コルニコフが、ひいては作品の統括的なテーマ構成が要求する真偽の判定と関わらせるべく作品自体が内包する、「読者の役割」に着目する。結論からいえば、この「読者の役割」が、態度決定へと向かう二者選択のまなざしを保持しつつ、態度決定以前の「宙づり」状態に留

まり続けることにあることを明らかにしようとするものである。作品の基本的な構造においては、ツヴェタン・トドロフのいう「幻想」\*<sub>6</sub>を多く参照する。そこでの話題の中心は、「幻想」が生じる場所である「読者」の概念について、真偽判定の視線が依拠しようとする（小説における）本当らしさ<sup>7</sup>について、語りの情報としての信頼度と深く関わる「一人称の語り手」という語りの構造について、という三点となるだろう。トドロフの理論は「幻想文学」というジャンル規定を指向する抽象化の成果であるから、それと具体例である一つの作品の一致は、トドロフ自身指摘するように、単なる偶然の一致以上の何物でもない。\*<sub>6</sub>が、ここで分析の第一段階として、トドロフの提示するモデルとしての「幻想」との類似に注目することによって、「死後の恋」が構造的に有する幾つかの条件とその意味の可能性を整理することが容易になる。そして次の段階では、作品がその歴史性において実際に機能する可能性の側面が取り上げられなければならない。端的にいえば、一九二八年に夢野久作という作家によって発表された「死後の恋」が想定し得る「読者」の条件があるのであり、それはトドロフの抽象化された「読者の機能」という枠組みでは捉えきれないはずである。歴史的な条件下にある読者像に近似的にでも迫ろうとする試みは自ずから、読者にとつての小説の「本当らしさ」と、読者が判断しようとする語りの性格・信頼度についての、より具体的な考察を促すだろう。この二段階の分析を通して、具体的条件のレベルで要請される「読者の役割」が、「宙づり」効果の継続・維持に負担するものである、という仮説を提出することが第一章の目的である。さらに第二章では、特に今日的な条件下にある一読者として「死後の恋」の解釈を試み、それがどのように不可能であるかを示す具体例としたい。なお、本論の主眼である、「死後の恋」の歴史的条件と深く関わる構造的・特性としての「宙づり」効果の指摘は、今後、同様の機能を見出せる作品の収集・分析と、その先に機能史的な配置図の構想という目標をおいて行われるものである。

### 【第一章】「死後の恋」における「宙づり」効果

#### （第一節）トドロフの「幻想」と「読者」

幻想とは、語られた出来事について読者が抱く曖昧な知覚のことだと定義される。ただちに明確にしておかねばならない。このように言うことでわれわれが念頭においているのは、特定の、個別で現実的な読者のことではなく、テクストに暗に包含されている「読者の機能」だということである。\*<sub>7</sub>

トドロフは『幻想文学論序説』で、「怪奇」と「神秘」の境界域という示差性において「幻想」を定義しようとした。語られる超自然的出来事が結局は現実の諸法則によつて説明されるものである（トドロフによれば怪奇）か、説明のつかないものとして受け入れられるべき（同じく神秘）かという不確定な時間をしめる「ためらい」に注目した十九世紀以降の議論のなかで、トドロフの評価されるべき点は、ためらうのが読者であることを強調したところにある。

内包された読者について、ヴォルフガング・イーザーは次のように整理した。それはテクストが自身の現実化のために前もってそなえている条件であり、どのテクストにも構造的に組み込まれている構成概念である。文学作品の作用にとつて必要なあらゆる前提条件を具象化するというその性質は、経験的な外界の現実には拘束される限界性を払拭するところに成立する。\*<sub>8</sub>イーザーと同じく普遍妥当的な理論の構築に向かうべく想定されるトドロフの「読者の機能」も、「読者」をめぐる歴史的、社会的、文化的等々の差異の捨象によつて、テクスト自身の現実化と関わる役割を、テクスト間に共有される最もシンプルなレベルにおいて、理想的に果たすものとして示される。そのようにして取り出された「幻想」ジャンルの構造的・特性のうち、「死後の恋」に認められる共通点に着目することは、トドロフの「幻想」とここでいう「宙づり」効果の親近性を認めることを意味するが、後者の構造にみられる幾つかの条件とその意味の可能性の整理を容易にする以上の目的を持つものではない。むしろ「死後の恋」という具体的な作品の「宙づり」効果をもたらす構造が、テクスト間に共有される最もシンプルなレベルのみにおいて完結するものでないところに特異性を有することが重要なのである。このことに関連して、「読者」という用語で何かを明らかにしようとする時、どの面において差異顕在的でありまた差異抑圧的であるのかということに注意を

促す和田敦彦の論は示唆深い。

例えばイーザーの「内包された読者」という用語は文学テクストと読者との関係においては差異顕在的に読者を描き出すことができる。この用語は、語り方やもたらされる情報によって刻々に変貌する読み手のとらされる位置の時間的差異を記述することのできる理論だ。少なくとも読者を一貫した実体的な不変的な概念としてとらえるよりも、はるかに「読者」の差異を問題にできる用語「読者」なのだ。だが、一方でこの用語は、文学テクストと読者の関係を論じるという枠の外では差異抑圧的にも働く。なぜなら、世上に流布する実体的な用語群としての「読者」は認めないし、問うことができない。例えば読者集団の経済的な差異や地域的な差異、といったことは問題にできなくなってしまう。<sup>60</sup>

つまりここで行おうとすることは、「幻想」における内包された「読者の機能」の差異顕在的な側面の研究成果を利用しつつ、その差異抑圧的な側面、つまり個別の作品において期待されている「読者の役割」の条件をすくい上げ、その二面を「宙づり」効果という観点から関わらせる試みであるといえる。この目的において差異顕在的であろうとする「読者の役割」が、どの程度実体的でまた抽象的なのか明瞭にし難く、「死後の恋」以外の場所への汎用性が極めて低いという抑圧的な傾向を帯びることとは避けがたい。よって、そのあり方はあくまでも仮説であり、「死後の恋」という作品から一つの問題提起を導き出す手段として措定されるものであることは強調しておかねばならない。

ではここで再びトドロフの「幻想」に戻って、その構造を確認するところから始めよう。トドロフは、「幻想」の条件を次のように定義している。

幻想とは三つの条件が満たされることを要求する。まず第一に、テクストが読者に対し、作中人物の世界を生身の人間の世界であると思わせ、しかも、語られた出来事について、自然な説明をとるか超自然な説明をとるか、ためらいを抱かせなければならぬ。第二に、このためらいは、作中の一人物によって感じられていることもある。その場

合、読者の役割が当の作中人物に、いわば委ねられているのであって、同時に、ためらいもまたテクスト内に表象されることとなる。(中略)最後に、読者がテクストに対して特定の態度をとることが重要である。すなわち、読者が、「詩的」解釈も「寓意的」解釈も、ともに拒むのでなければならぬ。これら三つの要請は、すべてが等価ではない。第一と第三の要請が、真にジャンルを構成するものであって、第二の要請はかならずしも満たされなくてよい。<sup>61</sup>

第一の条件において、「自然」か「超自然」かという二者選択のためらいを生じさせる場面設定が「生身の人間の世界」でなければならぬという点に、その判断が依拠しようとする「現実」の存在が前提されていることに注目しよう。これは第三の条件と関連させると、例えば「彼女は鳥になった」という一文が具体的な「人間」も「鳥」も「変身」も「自由」も指示・表象しようとするだけ語句連鎖のレヴェルで受け取られるという「詩的」な読み方や、同じ文が「彼女は卒業した」等の転義した意味で受け取られるという「寓意的」な読み方を排除しなければならぬのは、「彼女」と指示されている人間が日常生活を送る「現実」の中で「鳥」に変身したという、まずは表象性と字義性において「現実」と関わる受容をされた上でしか、「自然」か「超自然」かという二者選択が生じ得ないことを示しているといえる。

この点に関して、「死後の恋」の読者はほぼ間違いなくその場面設定を「生身の人間の世界」という意味での「現実」とみなすといえよう。冒頭部分において《浦塩》の《スエツランカヤ》(九二頁※初出ではスエツランスカヤ)という実在の固有名で地理が設定され、《死後の恋》の出来事が生じた時間(《今年(大正七年)の、八月二十八日の午後九時から、翌日の午前五時までの間》九四頁)と語られている現在(出来事の三ヶ月後)が実在した史的時間に設定されていることは、この小説の世界に人間の生活する「現実」と地続きの法則を見出させる。しかし、特にこれらの設定を通して読者は、小説世界のより複雑な位置づけを要求されることにもなる。

自分の馴れ親しんだ世界にその世界の法則では説明困難に思われる出来事が生じるという物語に遭遇した読者は、「考えられる二つの解釈のいずれかを選ぶほかない」<sup>62</sup>というトドロフの見解は、「自然/超自

然」という二者選択の要求を、読者にとって理解の上で必要となることで生起するものとみていた。これに対して「死後の恋」では、冒頭からこの二者選択こそが関心の中心となるべきものであることが示され、読み進めていく際の強力な準拠枠として読者を拘束する。その意味で「ためらい」は読者が読書過程で次第に導かれるものでなく、出来事についての語りに先んじて予期されるのであり、そのため「死後の恋」の読者はこの二者選択自体を問題化し得ることにもなる。その一例として、積極的にテクスト外の歴史的な一地点とつながろうとする設定が、「現実」世界との類似という「本当らしさ」と同時に、「現実」の歴史的な一地点との関係において「虚構」世界であることを示すという二重性に読者が着目し得ることは、真偽の判定それ自体をどう解釈し、またその解釈が何に依拠するものとなるかをめぐる「ためらい」の喚起に関わるだろう。この「本当らしさ」の問題は、より具体的な読者像に近づいた考察を加えるために次節で再び取り上げることにする。

第二の条件は任意条件とされるが、「死後の恋」においてやはり複雑な様相をもって関わってくる。「死後の恋」には、語り手によるとレストラんで食事をしながら語りかけている相手として聞き手が存在する。読者にとつて、聞き手は真偽の判定を要求される受け手として、また日本人であるらしいこともその一因となり得るが、結末部における態度決定の前まではその立場に同一化し易い「登場人物」といえる。が、《死後の恋》の物語が語られている間、読者にその存在感がほとんど伝わってこない聞き手は、語りの逐一に対して向ける真偽判定のまなざしと決定前のためらいを表象するものとはなっていない。結末部分まで読み進めてきた読者は、ためらいの素振りを見せないまま思考を断ち切るかのような唐突さで態度決定した聞き手に違和感を感じ、それまでは同一化していたつもりでも実はためらう思考の過程を共有していなかったということに気づかされるといふ事態を指摘できる。そして、聞き手が自らためらいを断ち切って見せるとき、その理由の不明確さをもって、読者に同様の行為に出ることをかえって不安にさせる役割を果たし得るのである。ゆえに、トドロフの第二条件は満たされないが、読者の「ためらい」を持続させるという意味では、よりいつそう機能することが可能なものとして、聞き手が存在するといえる。

さらに、トドロフが「幻想」のディスクール分析において「ためらい」

の創出と関わる構造特性として挙げる、「一人称の語り手」という共通点に注目してみよう。トドロフによると、幻想的な物語の語り手は、普通、「私」と名乗る。「物語内に姿を現わす語り手」、「物語る」一人称」と呼ばれているこの語り手は、「読者の作中人物に対する同一化を、もつとも容易にする」。なぜなら、「私」という代名詞が万人に共通のものだからだ。ゆえに語り手は読者が容易に同一化できるような「ありきたりな人間」に設定される傾向があり、その場合、彼・彼女の言葉は作者のディスクールとしての性格が強調され信頼できる語りとして読者に受容される。つまり、読者は語り手の身辺に起きたという超自然的出来事を経験として信頼し、それを前提として「ためらい」という反応をするのである。また一方でトドロフは、語り手が物語の主人公であり、その作中人物としてのディスクールが強調される場合に「彼にも嘘をつく可能性がある」ことを「構造的ショック」と表現し、それもまた読者の「ためらい」を喚起することに言及している。<sup>62</sup>ここでトドロフが文学言語の真偽の吟味について、作中人物の言葉は日常的ディスクールと同様、真偽のいづれかであり得るが、テクスト内に作者の名において与えられたものは真偽の吟味が不可能であり、テクストの内的・一貫性の要請に依拠しているか否かではない、と前提していることは、次節で考察する「本当らしさ」と深く関わる問題でもある。ここでの論点を明確にするために、「死後の恋」に即して整理していこう。

「死後の恋」の語り手コルニコフは、一人称の語り手であり、物語の主人公として姿を現す。彼が自らを指す用語「私」は、読者を自らに或る程度同一化させることが可能であるが、読者による真偽の判定の対象として、また後で詳述するが、語り手の精神状態および語り手の内的・一貫性に対する疑惑の可能性があるという信頼度の低い語り手の性格において、読者が完全に同一化することは難しいと思われる。どちらかといえば、「私」という語り手のあり方は、「私」に対する「あなた」としての聞き手に読者の同一化を促すものとなっている。それは特に、聞き手の態度決定以前において顕著だろう。が、前述したように聞き手は読者が最終的に同一化できないものとして機能するといえ、読者は作中人物とともに考えるのではなく、そこから距離をとって考え、ためらうことになる。「死後の恋」との関係で注目すべきは、後者の「構造的ショック」であろう。トドロフ自身はこれを詳述しなかったが、「死後の恋」において

このレベルでのためらいが存在することの意味は大きい。トドロフは、語り手が物語の主人公となる場合に、作者のディスクールとしての信頼性と作中人物のディスクールとしての疑惑性との共存における、後者の存在の可能性が読者に引き起こすジレンマをみていたようだ。これに対し「死後の恋」は、ほぼ完全に<sup>20</sup>一人称の語り手の発話のみで成立することによって、作中人物のディスクールとしての性格が極限にまで押し進められているといえる。そして語り手コルニコフが周囲から《キチガイ》と名付けられていること、語りに一貫性の欠ける部分が見られること、酒を飲んでいらいらすること等、読者自身の規範に照らして語りに向ける信頼度に揺さぶりがかけられるような仕掛けによって、ジレンマは違う様相を見せるものとなる。つまりそこにあるのは、情報として信用できない部分があるのではないかという不安でなく、信用できる部分がないのではないか、という不安なのである。このコルニコフの語り性格の信頼度をめぐる、読者のためらいの具体的様相を、第三節で考察したい。

以上、トドロフの「幻想」の定義を手がかりに、「死後の恋」において二者選択をめぐって生じる読者の「ためらい」の基本的な構造を整理し、「本当らしさ」を構築・破壊しようとする仕掛けについてのより具体的な読者像を通じた考察の必要性を示した。さらにそれとも関連して、「幻想」の構造特性の一つでもあった「一人称の語り手」に着目し、コルニコフの語り性格について同じく考察を進める方針を明らかにした。「死後の恋」という具体的作品に仮説できる読者の役割としての「ためらい」の諸相を明らかにすることで、それらを要素としたシステムとしてある「宙づり」効果の指摘へと進めるだろう。

#### (第二節) 「本当らしさ」をめぐって

「死後の恋」は一九二八年に発表されたが、作中物語の場面設定は一九一八年八月、ロシア革命・日本のシベリア出兵下のロシア《ドウスゴイ付近の原っぱ》(九四頁)、語りの場面設定はその三ヶ月後の《浦塩》《スエツランカヤ》のレストラン(九二頁)となっている。この具体的な「現実」とつながろうとする設定の二重の意味を見ていくために、その宛先としての読者について、本稿がとる立場を確認しておこう。掲載

誌『新青年』で「死後の恋」を読んだ読者個々人が、丁度十年程前のシベリア出兵をめぐる「体験」を組み入れた、そのそれぞれの読書過程をここで再現することは、勿論不可能である。作者の死後刊行が始まった全集類<sup>21</sup>、また七十年代以降続々と刊行されている文庫類<sup>22</sup>等でこの作品に接した読者に至っては、そのシベリア出兵の「体験」を知識として殆ど持たない場合も含めて、具体的差異は一層捉えがたいといえる。が、特に発表当時に期待される読者の「体験」が影響する読書・解釈になることを、予期した上で利用しようとする作品であること、そして時間的に距離をもつ読者にとつてもその効果は少なからず発揮され得ることを示すために、ここでは、「死後の恋」の読者が立つ時間的な地点の差異は問題にしない。二〇〇〇年にこの作品に接する一読者においても、例えば当時の新聞を手にすることで距離を縮めることは可能であるし、発表当時作品に接する読者の全てに当時流布した情報の所有を期待するのは不可能だからだ。本章では、或る程度の活字体験を通して、シベリア出兵周辺の「史実」をめぐる報道・言及や、作者の他作品や、その他諸々の言説を「死後の恋」の「同時代」とみなし関連させ引用する可能性を取り出し、その集合体を、「死後の恋」の可能性を引き出すものとして内包される「読者」と仮設する。「死後の恋」よりも時間的に遅れる作品の引用の可能性が示されるのはその理由による。また、そこで示される「読者の役割」の可能性のうち幾つかが欠ける場合にも(またもともと網羅などし得ないのだが)、システムとしての「宙づり効果」が構成されることは、自ずと明らかになるだろう。

場面設定の話題に戻し、特に《浦塩》という地名が読者に喚起する「本当らしさ」から述べることにする。これまでに述べたことを整理しておくくと、テクスト外にも存在する固有名を用いて場面設定することは、読者に小説世界が自身の人間の世界であると思わせるのに十分であると同時に、信じるか否かという二者選択がキーワードであるという枠組みの中で、小説世界が史的事実との関係において「虚構」であるということまで問題化させ得る。そして特に後者の二重性は読者に、真偽判定そのものの解釈をめぐる「ためらい」を創出するものとなり得る、ということであった。

ここで加えて指摘したいのが、《浦塩》という地名そのものが物語として有し得る「現実／虚構」の二重性である。例えば、シベリア出兵当時

のウラジオストクの「いかがわしさ」を彷彿とさせる資料を挙げよう。一九一八（大正七）年九月二日付け『東京朝日新聞』には、「此頃浦塩では活動の幕間に茶番が流行する、その日も乞食の服装をした男が現れて、滑稽な口調で時局を慨し、往來を彷徨ついで居る犬になつても好いから自由が欲しいと結んだ。観衆は大喝采をした」というルポルタージュ的な記事が見られた。<sup>20</sup> ここには、日常の中に虚構が混在しているような「いかがわしさ」が指摘できるだろう。さらに、作者夢野久作の諸作品のうち、同じく「浦塩」を舞台とした「支那米の袋」<sup>21</sup>に注目しよう。この作品のあらすじは、踊り子ワーニヤがアメリカの軍人を自称する男ヤングに騙されて、上海かどこかに売られる途中に計画変更で海へ捨てられたという経緯があつたらしいが、ワーニヤはあくまでヤングの愛とその結果としての「シンジュウ」未遂だつたと信じており、舞踏場に戻つて知り合つた日本の軍人に向けて彼女とつての一部始終を語つた後、彼と無理心中を図ろうとする、というものである。<sup>22</sup> 一九一八年一月から一九二二年十月にかけて日本のシベリア出兵がなされたが、直接その影響下にあつたウラジオストクという場所・時間が、歴史的な一地点であると同時に日常的な感覚から切断された物語の背景とされているのがわかる。この二重性を共有する「同時代」を、作者も含めた「読者」にみようとするのが本稿の立場である。

同様のことは、ロマノフ家の宝石やアナスタシヤ皇女といった題材にも指摘できる。ロマノフ家の宝石については、一九一八年八月二十日に報道された《怪外人が持ち廻つた露国の国宝と称する鍍金物》事件<sup>23</sup>に端的にあらわれている「いかがわしさ」が指摘できるし、夢野久作の言及の中には、レーニンがロマノフ家の王冠が欲しかったがために革命を起こしたのだというような探偵小説が書きたい、といったものもある。<sup>24</sup> アナスタシヤについて、当時の『東京朝日新聞』紙面にその名はみえないが、ニコライ二世と皇族の殺害説、安全説は紙面に何度も繰り返されたのが確認できる。七月から九月にかけて約二十回の報道が数えられ、八月三十日には「廢帝を殺したる後皇太子をも射殺す いたはしき其の最後」として皇太子の銃殺場面が大きく伝えられるも翌月には「前皇室悉皆無事説」（九月二十七日）が報じられ、十月七日には「廢皇后皇女失踪」とも伝えられた。その安否は謎につつまれた物語として新聞読者に受け取られたことが推察されるのである。<sup>25</sup>

可能性として興味深いのは、小説世界の設定と近接する一九一八年九月に芥川龍之介が発表した「奉教人の死」<sup>26</sup>を引用することである。「奉教人の死」は、作中に偽の典拠を示すという仕掛けが、「現実」の好事家を巻き込んで機能し、話題となつた。<sup>27</sup> この作品において、『聖人伝』という典拠が作者にあり、また典拠の存在ということに注意を喚起する「二」章があることは、「南蛮」に取材する作品に求められた「智的関心」<sup>28</sup>つまり「現実・史実」との関わりを満たすものであり、典拠として示した『れげんだ・おうれあ』自体が作者の創作であつたこと、そして『聖人伝』にはみられない新たな主題と関わりうとしたことは、近代文学に求められた作家独自の「情的感興」、つまり「虚構」性を指向していた。両作品の部分的類似を感じたとしても、この二重性をも感知する読者を期待するのはかなり難しいかもしれない。が、そこまで期待できずとも、「死後の恋」の男装の麗人が炎の中で乳房を露わにする状況で女であることが判明するという設定を「奉教人の死」のパロディと見ること、《死後の恋》のクライマックスといえる場面の虚構性を感じる読者も、真偽判定に際し「ためらい」を創出する可能性の一つに数えられるだろう。

以上が、「死後の恋」の「本当らしさ」を問題化し得る読者において、「ためらい」につながるような二重性、いかがわしさが生じる場面の分析である。文学のテクストは「現実世界」と指示関係に入ることがなく、テクストの内的な一貫性との関わりにおいてのみ有効か否かの判定がなされるといふ、テクスト間に共通のレベルを対象とした考察では、特にこの節で指摘するような効果は取り上げられないことになる。勿論、個々の効果が同等に発揮されるとは言い難いが、「宙づり」効果が現象として生起するその様相は、このような要素としての個々の効果の組み合わせのヴァリエーションとして捉えられるものといえよう。

### （第三節）「一人称の語り手」をめぐって

「死後の恋」は「私」の独白という形で成るものであり、読者には「私」の言葉を通してしか情報を得られないにもかかわらず、その言葉（の一部あるいはほとんど全体）を信じないという選択肢が与えられている。一人称の語り手が物語の主人公であり、さらに小説全体がその発話で形

成されるために一層、信頼度が問題となり得ることは前に述べた。が、そのような形式をとる小説全てに語りの信頼できるレベルが見出せないというわけではない。<sup>25</sup>「死後の恋」において語りの信頼度が大きな問題となるのは、以下の数点が関わるからだと思われる。

まず、「私」が語りの途中で二度嘘をついていないと主張する(百頁、百四頁)こと。これによって、コルニコフが少なくとも嘘をつこうとすれば可能な状況であり、またそのような状況にコルニコフ自身意識的であることが読者に確認されるからである。二つ目は、コルニコフが酒を飲んで語っているらしいこと(九二頁)。これは、酔っぱらいの言葉ということで信頼度が低くなるというだけでなく、医学的言説として、アルコール中毒が精神病にカテゴライズされることが参照され得るからである。例えば一九三四年三月刊行の『日本内科全書 卷七 精神病編』<sup>26</sup>の精神病各論「中毒による精神異常」の章には「酒精中毒」の項があり、幻聴や幻覚に基づく系統的な妄想を有する症状を挙げているが、その最も重いものとされる「コルサコフ氏精神病」は、「虚談症」を伴うとしている。コルサコフとコルニコフの名前の似通っていることも、この類の言説の引用を促し得るだろう。さらに、原っぱから森の方を見つめていた時に気を失った時間があるということ(百二頁)、その後森へ近づいた理由を《その時の私には全くわかりませんでした》としていること(百二頁)は、コルニコフが全知全能ではなく限界性をもち、その範囲で語っているということを、読者に念押しするだろう。また、リヤトニコフの屍体には《全身のどこにも銃弾のあとがなく、又虐殺された痕跡も見当たらない》<sup>27</sup>というにもかかわらず、その下腹部の《皮と肉が破れ開いて、内部から掌ほどの青白い臓腑がダラリと垂れ下っているその表面に血まみれたダイヤ、紅玉、青玉、黄玉の数々がキラキラと光りながら粘り付いて》いたと語られる(百六頁)のには、矛盾とまでは言わずとも、語る中での操作の跡、つまり実際に目に入ったものの順番の効果的な再構成がみられ、それに気づいた読者は、語られる以上回避できない物語化の過程が存在することを意識させられるだろう。そして、作品の末尾において去ろうとしているらしい聞き手にコルニコフが《まだお話することが……》(百七頁)と迫ろうとすること。これを、語りが未完であり語りつづけることによって既に語られたものが影響される可能性が示唆されているとみなす読者もいよう。読者がコルニコフの話の信憑

性を疑うきっかけ・理由となり得る箇所はこのように散見される。

コルニコフによる主観的判断の信頼度の低さも指摘できよう。彼は、自分も含め他人やその行為に対してよく診断を与える傾向があるが、その判断は読者から安直さを批判され得るものである。例えば貴族(階級・血統)があたかも先天的に同じ(優性の)性質・趣味を共有するかのようになしている(九五頁、九六頁)ことや、同性愛の行為を《獸性と人間性の氣質を錯覚した、一種の痴呆患者のする事》と語っている(九五頁)こと、リヤトニコフのことを《誇大妄想狂みたような変態的性格の所有者》ではないかと疑ったこと(九九頁)に注目しよう。

貴族というキーワードについては、ゴゴリの『狂人日記』<sup>28</sup>で、日記中の「おれ」、アクセンチ・イワノフが令嬢に恋をし自らをスペイン王と思いついていく過程で、自らの九等官・貴族という身分にアイデンティティを置き、同時にコンプレックスを感じている描写が強調されていたことを引用することが可能だろう。一般的にも血統は妄想の主題の一つとして指摘されており、<sup>29</sup>その意味で自らの身分も含めて貴族(皇族)の血統をめぐる物語の中に生きるコルニコフの身分が自稱に過ぎないことが、読者において注意を有するものとなり得る。同性愛については、『日本内科全書』<sup>30</sup>において、「同性相親症」として神経症のうち性異常症に分類され、特に「兵営・遠洋航海中・寺院・尼寺・女優・花柳界の人等」におけるそれは代償的なものとされ、病的とすべき生来的なものとの区別が促されているが、これが一九三四年頃の医学的な通説となっていたとみてよいだろう。コルニコフは同性愛を《痴呆》(今で言う精神分裂病である早発性痴呆を指すか)の症状と言いつつ、軍隊に所属する二人の関係を念頭に置かなければ、作品の発表当時においてもそれを医学的に妥当な見解とみなさない読者が想像される。特に今日的な視点から、精神分析的な考察において同性愛的感情が一過性のものとして存在することを異常とは見ず、思春期以降の環境や体験をその原因として見ようとする傾向も強まっていること<sup>31</sup>を考慮すると、コルニコフの見解が一般的に合理的とはみなされ難くなっているものがあるのは明白である。少なくとも、この部分から、コルニコフを自分の与する同時代の大衆的な価値観を検証する視線を持った人物とみることは難しいだろう。コルニコフの限界性は、特に後々の読者の批判の前に晒されるものとしてあり、その証言内容に対する信頼度を低くし得る



ものとしてあるといえる。

また、読者により根本的な懐疑を引き起こすことが予想されるのは、語り手コルニコフの「異常さ」がほのめかされていることであろう。コルニコフは自分を《キチガイ》(九二頁)、《精神病患者》(九三頁、百五頁)と診断する人々の視線にある意味正当性を認めている。<sup>\*)</sup>が、《モスコの大学》で心理学を専攻したという経歴を自称する(九四頁)コルニコフにおいても、「私は狂っています」という命題は内的に真偽を決定することができない。<sup>\*)</sup>他人による診断が妥当かといえ、それも無条件に信賴することが難しいものとしてある。例えば、「死後の恋」発表当時の『東京朝日新聞』紙面には、「狂」によって処理される事件が多くみられる。実際に紙面をみると、「登山少年 発狂」<sup>\*)</sup>「妻子四人を惨殺して自殺す 精神狂つた若い農夫」<sup>\*)</sup>「火薬庫の衛兵 勤務中発狂」<sup>\*)</sup>「持てあます毒殺狂人」<sup>\*)</sup>「行倒れ金髪美人 狂人らしいドイツ女」<sup>\*)</sup>「突然、狂人に斬られて危篤」<sup>\*)</sup>といったセンセーショナルな見出しが目を引く。これらに共通するのは、当人に精神病歴があったという言及がなく、また事件後の精神鑑定の有無が伺えないことであり、例えば「登山少年 発狂」という記事は、登山中「連日の困苦で精神に異常を呈し木曾節を歌つて踊り狂ひ加ふるに脚気のため歩行不自由となつて居るので、登山仲間が「やむなく狂つた青年一人を残して下山し」たことを伝えている。誰によつてまた何をもつて診断が下されたかが明白でないまま、青年を精神異常と名付けることに加担するものとなつて指摘できよう。(松山巖によると、新聞紙面が「狂」の要素で飾られる傾向が強いのは、大正から昭和初期にかけてであるという。<sup>\*)</sup>本稿における調査は、大正七年七月と昭和三年八月十月を対象とし、昭和三年の三ヶ月間は十件の事件が「狂」と関連づけられたのに対し、大正七年の三ヶ月間は五件であることを確認した。精神異常という名付けの行為が問題化される土壌は、小説の時代設定である一九一八年頃よりも、発表された一九二八年頃に見出せると思われる。)

またここに、夢野久作の集大成とされる『ドグラ・マグラ』<sup>\*)</sup>を引用することによつても、読者は精神病という名付けをめぐる問題意識が共有される空間を見出し得るだろう。一九二六年から執筆され十年余をかけて完成したこの作品は、「死後の恋」と執筆時が重なる作品でもある。

この作中、「キチガイ地獄外道祭文」の中で九大精神病学正木博士は、人の心が狂つた、又は狂っていないという確かな証拠はどこにもなく、よつて医者が診断・治療するのは不可能であること、またその病名付け方は、「放火狂」や「色情狂」など、素人が見かけどおりに名付けるのと同様変わらないことを主張している。この正木博士の言葉には、時代に対する厳しい検証のまなざしが露出していると考えられる。これに対して「死後の恋」のコルニコフの言動と、コルニコフを《キチガイ》と名付ける《浦塩》の人々には、特に昭和三年頃の紙面に顕著な、いわば批判されるべき大衆性が備えられているのであり、読者はそれを見出すという選択肢を与えられているといえよう。

そして勿論、読者には自身の診断としてコルニコフに病名を与えるという選択肢も与えられている。前述のコルニコフ氏病しかり、コルニコフの「笑い」に注目して、そこに夢野久作が「狂人」を描写する際のテクニクとしての「笑い」<sup>\*)</sup>を見ることも可能である。またこの場合に、作者の「猟奇歌」の一節、「悟れば乞食／も一つ悟れば泥棒か／も一つ悟ればキチガイかアハハ」や、「タツタ一つ／罪悪を知らぬ眼があつた／残酷不倫な狂女の眼だつた」にみられるような、「狂人」進化した人間「狂」の構図<sup>\*)</sup>を援用し、コルニコフをそのようなものとして位置付ける解釈が可能である。例えば、日常の枠組みでは捉え難い出来事を排除することなく直視しているという側面からその生き様を高く評価することができるし、彼を信じていることのできない(読者を含む)受け手は、批判されるべきものとして(自身を)見出させられるという構図が成立する。また、人間のあるべき姿勢を体現しているはずのコルニコフが、やはり他人との共有・共存を欲し苦悩せずにいられないことに、人間の個としての進化・完成に伴うであろう代償が予測されていると解釈することもできる。ただし、これらの解釈からも伺えるように、コルニコフに狂気をみようとする方向性は、彼の言葉を究極的には他者のものとするところに成立するのであり、作中における出来事はほとんど、読者自身が受け取ったそのようにはなかつたと疑われないわけにいかず、特にその細部を検討することが不毛とみなされ、例えば「コルニコフは自分が高貴な人物と関わるような存在であると他人から認められることを欲している」というような心理学的な知識を下敷きとした抽象度の高い読解となるのが避けがたいことは確認されてよい。

以上より読者が、コルニコフの語りの信頼度について、情報としてどれ程信頼できないものなのかを決定する根拠を、作品から保証されることは不可能であるといえる。返していえば、解釈するにあたっては、どの程度信じないかを作品外に依拠する前提として仮定する以外にない。コルニコフは大嘘つきでも、理解不可能な精神異常者でも、精神異常者という聖人でも、精神異常と名付けられたただの人でもあり得るが、一つの解釈においてその全てであることはない。それぞれが互いを排除しあい、またどれが優勢を占めるかで小説の言葉の位置づけが全くと言っていいほど異なってしまうのである。そしてこの作品が、どの決定も保証しないまま読者に決定を促し続けるところに、「ためらい」読者を構造的に内包する作品の中でも特異な有り様が指摘できる。

#### （第四節）まとめ——システムとしての「宙づり」効果——

第一節から第三節にかけて、「死後の恋」の読者に様々なレベルで生じる「ためらい」の可能性が取り出されたが、最後に、これらを要素として形成されるシステムとしての「宙づり」効果が明らかにされなければならぬだろう。トドロフの「幻想」は基本的に、「自然な説明」と「超自然としての受容」との間で不確定の時間を占める「ためらい」という読者の知覚のことであり、どちらかが選ばれることで消えてゆく短命なものだった。確かに問題が一つの二者選択に集約されれば、読者が双方の可能性を吟味して、自身の納得のためにより役立つ方を選択することに問題は無い。最終的に読者が選ぶのが「わからない」、つまりどちらにも有り得て決定できないということであっても、作品のテーマに関わる納得がその二者選択に対する態度決定と別の場所に得られるならば、読者がそれ以上「ためらい」に執着することもないだろう。つまり、読者は「わからない」という態度決定に成功するのである。

こうしてみてみると、「死後の恋」において、読者が絶えず二者選択をめぐって《死後の恋》そして「死後の恋」と関わるという枠組みが存在することは、生じた「ためらい」の維持を支えるのに不可欠であると思われる。それを前提として、大まかに捉えれば読者の態度決定には、作品を構成する言葉の質というレベルと、その上に構築される作中物語によって具体的に要請されるレベルがあり、後者においてはさらに、真偽

の判定という二者選択自体を問題化し、解釈するというレベルが前提されなければならない、ということである。

言いかえれば、まず、ある時代・社会においては精神病と名付けられ得るものだった人間のある状態を、他人が共通の足場に立って（彼の言葉による情報を共有して）理解し、また価値付け得るものとみなすか否かという二者選択においてためらいが生じると思われる。既成の医学が体現する一見合理的な説明である病名に則って処理するのか、反対に全く「正常」な、全てが理解可能な状態として受け入れ解釈するのか、あるいは個人同士の差異の範囲内の問題として存在する理解・誤解を読み解いていくのか等、小説全体を構成する言葉の質という根本的なレベルで生じる「ためらい」は、その上に構築された《死後の恋》の物語が具体的に要請する、信じる・信じないの二者択一が生じさせる「ためらい」と相互に影響しあい、それぞれが解消されない状況を持続させる。

これを読書過程に帰していえば、個々の読者は自らの知識・規範の網にかかる要素を発見するたびに、また発見したそれらの関係を形成しようとするたびに、態度決定をめぐる「ためらい」が生じると思われる。そしてそれらを仮定としての態度決定で乗り越えていく読書過程においては、選択されなかった選択肢が期待させる解釈の可能性の存在（それらはお互いを排除しあうように存在する）と、自らの選択の積み重ねの結果としてある解釈の、作品に保証されない不安定さが認識される一方で、準拠している枠組みである「真偽の判定」そのものの解釈までが問いの対象とされ始める。そして、読者との完全な同一化を拒むかのような作中の受け手は、自らためらいを断ち切ってみせることで、その理由の不明確さをもつて、読者に同様の行為——説明なしの判定への飛躍——にできることを禁止する。つまり、最終的な態度決定以前に、常に、多くの、レベルの違う、仮定としての態度決定（この態度決定のそれぞれにおいて、互いに影響しあい一連の共鳴関係を形成する、要素としての「ためらい」が創出される。）が前提されなければならないはず、また決定不可能であることに安住することも許されないという、「ためらい」の持続するシステムが可能になっているのである。このシステムを、「幻想」と差異化する意味で「宙づり」効果と名付けたいと考える。

以上三節にわたって、「死後の恋」における「宙づり」効果の構造をめぐって述べてきたが、最後に、具体的な条件下にある一読者として、こ

の「宙づり」効果が現象として生起する場面の一例を示したい。真偽の決定から出発し、その前提を満足させるような解釈を試みる事が、どのように不可能であるかを現すのが目標となる。

## 【第二章】「死後の恋」の解釈の試み

私たちは、「死後の恋」の時代設定と夢野久作の執筆時期という「同時代」に関する知識の一部、例えば一九一八年七月前後の新聞報道がニコライ二世とその一家の殺害説と殺害否定説を盛んに繰り返すものだったことを情報として解釈に動員することができる。また、今日的な知識、例えば一九九八年にニコライ二世の遺骨のDNA鑑定の結果が「本物」と出て、皇帝一家の工力チエリンブルクでの銃殺という通説がさらに強められたことを解釈の下敷きにする事も可能である。どのような解釈においても解釈する側に属する情報に依拠しないということは不可能であり、自らの解釈を説明する必要に迫られれば、自らの依拠するものとその依拠が意味するところに可能な限り意識的になる以外にない。

これから行う「死後の恋」へのアプローチは、この作品の解釈行為が不可避免的に破綻に至るさまを演ずるものとなる。作品の統一的テーマを構成するはずの真偽の判定に依えつつ作品内の諸要素を一貫性のある説明の中に配置することが不可能であるということを示したいのである。

解釈にあたってまずは、読解に耐える可能性の高い前提を探ることから始めよう。コルニコフの《死後の恋》を「偽」とすると、聞き手の最終的な態度決定と同一化する必要があるという困難が生じる。またコルニコフの語り全体を共有できない言葉の集積とみなす（例えば精神分裂病という他者の理解不能な言葉が、独り言として紡ぎ出されている等）に至る方向性は、語られた細部の解釈から遠のいてゆく（例えばコルニコフのことを《キチガイ》と名付けた多くの人々が、理解不能なものというカテゴリーに分類することで納得・安心したように。）ものであり、究極的には真偽の判定という作品からの呼びかけまでも解消してしまうことになる。よって、小説の読者の前に、ある一貫性を持った解釈の構成を欲望させる存在として投げ出されているという一般的といつていい作品像

に依拠し、まずは消去法的に「偽」でないことを期待するところから出発することにしよう。つまり、コルニコフの語りには物語化に伴う情報の取捨選択・再構成・誇張、また主観の視野を出られないことの限界といった側面において、文字通りに信用することはできないまでも、それは誰の語りにおいても生じることと程度の差でしかない。つまり、コルニコフは読者にとつての他者としてではなく、理解可能な範囲での差異を有する「わたしたち」の一人として登場しているとみるわけである。

コルニコフの言葉に可能な限り寄り添うこと、つまり《死後の恋》は基本的に説明可能な合理的出来事であるという前提に立つことが確認されたところで、作品全体のペースペクティヴの終着点であるコルニコフの最後の台詞の解釈の可能性を先に探っておこう。作品全体に渡る一貫性を持った説明を試みるにあたって、その結末部分は特に欠かすことができないという一般的な傾向に依拠すると同時に、聞き手の態度決定後に読者に与えられる情報としての重要性に注目する意味で。

コルニコフの《ああッ……／＼……アナスタシヤ内親王殿下……》という台詞は、特に思わず漏らした声を表す前半部分から、驚きあるいは落胆という二つのニュアンスの解釈をそれぞれ導き出せると思われる。前者ならば、幽霊または幻覚といった映像として「アナスタシヤ」を目の前にしている、という解釈があり得るが、この場合、コルニコフの精神状態の異常さ・不合理な状態が示されることになり、《死後の恋》に対する合理的説明を見出そうとする解釈とは齟齬を起すことになる。

驚きの表出と見、かつそれが合理的な状態であるとする解釈は、そこに（作品中の一貫性において真なる）アナスタシヤがいる、というものである。この解釈を成立させ得る伏線もやはり、作中に散見する。貴族の女性でありながら男性の兵卒に身をやつていたことが語られるリヤトニコフと、皇女でありながら男性の軍人に身をやつていることになる受け手アナスタシヤの状況が対の関係となること。これによってお互いがお互いであり得るものとして補強しあうことになる。また、受け手の《露西亜語が外国人とは思われぬ位お上手》で、露西亜人の《気風に対して特別に深い、行き届いた理解力を持つておいで》であり、そのため《露西亜人に対して特別に御親切なことがわか》った（九三頁）というコルニコフの観察が、露西亜の元皇女としてのアナスタシヤ像に（おそらくは読後）重なること。これによって該当箇所は、単なるお世辞

以上の働きをもつことになる。また自分こそが当のアナスタシヤだからということになれば、受け手の結末部における唐突な拒絶にも合点がいくだろう。(とすると、リヤトニコフはとりあえずアナスタシヤではなかったことになり、その点はコルニコフの思い込みということになる。)作品のオチとして偽の判定が下されるという、テーマに関わる読者の納得が得られる可能性が高く、また最もインパクトのある結末を提出できるのがこの解釈ではないだろうか。しかし、疑問は残る。このコルニコフ自身による真偽判定が読者にとつても決定的であるといえるだろうか。アナスタシヤを外見からは識別できないコルニコフが、何をきっかけに、聞き手の去つていこうとするおそくは後ろ姿を見るに至つて当人だと気づいたのか、読者は知ることができないのである。リヤトニコフをアナスタシヤだと勘違いしたように、聞き手をアナスタシヤだと勘違いしたのではないかという疑いさえ生じ得るし、「リヤトニコフはアナスタシヤでなかった」という意味での「偽」が、コルニコフの単なる思い込みともいえる些細な部分に対する評価であり、《死後の恋》という物語自体に対する評価となり得ていないのではないかという疑問にも接続し得る。

一方、これを落胆の表出と見ればどうだろうか。主観的な側面があるにせよ他人にも理解不能でないはずの出来事・物語を聞き手から拒絶され、コルニコフは救い・承認を求めて死者である恋しい人に呼びかける。この場合、小説の終着点は全体を統括する焦点というより、冒頭へと回歸する通路の役割を果たすことになる。つまり、受け手の「偽」という判断はコルニコフの納得を得られず、コルニコフは死者への語りかけを選ぶ。が、これまでもそうであったようにそこに甘んじ続けることができず、他の生きている人物を見つけて同様の行動をとるだろうことが読者に予測されるのである。(この結末部の解釈が、第一章でみてきた「宙づり」効果の大きな一端となり得ることは言うまでもない。)

以上の考察から、最後に示した落胆の表出としての結末部が、《死後の恋》を基本的に説明可能な合理的の出来事であるとする前提を満たすものとして、消去法的に最も相応しいと言えるだろう。小説の結末部の解釈の可能性について確認できたところで、《死後の恋》に合理的の出来事としての説明を施す試みに入ることにする。コルニコフの言葉に可能な限り寄り添おうとする前提をもつこの読者は、宝石の存在という物証を信じ

ることから出発する。つまり彼の出身を信じ、宝石の鑑定眼を信じるのである。またコルニコフが伝えるリヤトニコフの言葉を信じるころから、リヤトニコフが貴族であることを信じる。ただし、リヤトニコフがアナスタシヤかどうかを前提として決定することは留保している。コルニコフ自身による特に根拠が希薄な判断として、思い込みや勘違いを疑う余地があるとみているのである。

リヤトニコフはロマノフ家の子孫かどうかはともかく本人が示唆するように貴族の出であり、家の再興の資本とするために本物の宝石を渡されていた。両親や同胞たちが銃殺されたという情報にショックを受け、《一日も早く両親の処へ帰りたい》(九七頁)という唯一の望みを失ってしまったリヤトニコフは、趣味・価値観に共通点のあるコルニコフに、自分が女であるということは伏せて相談を持ちかける。リヤトニコフが最も心配したのは《身分が曝れ》(九七頁)て処刑されることであり、宝石を持ち歩くことはその危険を大きくする。《僕はもう……何の望みもなくなつて……》(九七頁)と嘆くリヤトニコフは、家の再興を考えるとこころではない状態であるが、《両親の形見》としては《生命にも換えられない大切なもの》(九六頁)である宝石を手放すことができないというジレンマに立たされていたからである。女であることを隠し続けようとしたのも、身の安全を図るためだった。結果的にその心配が現実のものとなり、彼女は女として陵辱され、宝石はその身分をばらしたかどうかはともかく、下腹部に撃ち込まれるという殺害の決定的な表象となった。

コルニコフは宝石に対する欲望を感じる以前に森の中へ入つていった自分の意図や気持ちの説明できない理由を《眼に見えぬある力で支配されていた》からだと考ええる。しかし、いざ森の中に入つてみて《全くの空虚》《たつた一人》(百三頁)であると感ずるや否や平生の自分を取り戻したという。この一見不可解な彼の行動は、《天国》(百三頁)という言葉に象徴されるような、一種の共同体を欲していたことを意味する。彼が望むのは、一人で安全にニコリスクへ逃れることなどではなく、自らに属している軍隊・分隊という共同体との運命の共有であったのだ。コルニコフの状況は、《家族や財産を一時に奪われて極端な窮迫に陥》(九四頁)、本名をふせ、お互いの詳しい身分を明かしあうことなくリヤトニコフと《純な王朝文化》を語り合うこと(九五頁)ぐらいいしか貴

族の証らしきものがないというものだった。つまり貴族であるという共同意識が革命によって傷つけられ、そこに安住することが叶わなくなつたわけである。コルニコフは自らの帰属場所を求めるがゆえに《一番嫌いな兵隊になつた》(九四頁)。結局は分隊も全滅し、彼は次なる共同体を求める。それが、リヤトニコフとの《魂》(百六頁)の結びつきであり、このコルニコフの《信念》を《真実》として共有する(百七頁)、いふなれば《神秘》の共同体であつた。それが達成されなければ、彼の死は彼にとつて最も絶え難い永劫の孤独となつてしまふのであり、反対に達成されれば、彼の死こそが共有すべき彼の言葉を完結・完成させるだけでなく、死後《魂》のレベルでの共同体が存在する証ともなるのである。ここに、《信念》が《裏書きされ》た後の自殺を望んでいる(九四、百七頁)ことの解釈が可能となる。

コルニコフが訴える恐怖・苦痛についても説明できるだろう。《死後の恋》という現象は、《彼女の私に対する愛情》(百六頁)・《彼女の恋》(百七頁)↓二人の《魂》の結びつき(百七頁)↓《私の恋》(百七頁)という図式で語られていた。つまりコルニコフの中では、彼女の意思を受け入れて二人で形成した関係という解釈が成り立つており、彼女の「ほんとうの」意思の不確実さなどは問題となつていないのである。では、その《死後の恋》がどうして「私」をこれほどまでに苦しめるのか。コルニコフは(現実生活における物理的な)絶え難い孤独を解消すべく《死後の恋》の共有を求める。その行為は、与えようとする寶石に象徴されるように、この世に《死後の恋》の種を蒔くことでもある。彼が自らの死後にも見出そうとしている《死後の恋》は、やはり彼女の沈黙によって成立する世界であろう。コルニコフがそこに帰属・安住するためには、第三者の鏡に映し見ることが必要となる。しかし、実際に語る行為がもたらすのは孤独の体現・再確認であり、鏡となりうる(言葉をもつた)構成員を有する共同体が形成されない以上、彼はモノローグの世界への帰属を意味する死を迎える他ない。それが永劫の孤独であり、コルニコフの最も恐れ、苦痛にするところのものとみる。

こうして、結末部でのコルニコフの落胆を表す呼びかけは、沈黙としてしかない「アナスタシヤ」に向かつてなされるモノローグに過ぎないという意味で不毛であると言え、孤独の解消を図ろうとする他人への語

りかけ、つまり冒頭の状況へと回帰する通路となる。これは、コルニコフにとつて納得のいく真偽の判定が、聞き手によつて為されていないということである。

それならば、読者がこの連鎖を断ち切り、「真」なる判断を与える役割を持ち得るのだろうか。この読者は、《死後の恋》という作中出来事に合理的な説明を与えようとした。そして、コルニコフ自身による判断・解釈を「正したら」、あり得る物語であるとみなし得た。しかし、この読者が自ら合理的な説明を与えようとした前提自体を簡単に、ほとんど破壊してしまうことも可能である。前章で触れた語りの信頼性を低める諸条件のうちこういうものがあつた。——コルニコフはまだ語り続けようとしていたのだから、合理的な説明といつても不完全なものを対象として与えられたに過ぎず、未完に対して与えられる完結的な説明はそもそも成立し難いのではないか——。

また、留保していた事柄、リヤトニコフがアナスタシヤかどうかという問題を考えようとする、その判定には読者自身に属する情報を大量に投入する他なく、またその手段が作中のアナスタシヤの身元証明とならないことに気づかざるを得ない。なぜならこの解釈によると、この物語は「アナスタシヤ」の沈黙によつて成立しているのだから。

読者が幾つかの点をコルニコフの主観的判断とみて解釈することで説明・納得できること、しかしそれでも判断を留保せざるを得ない箇所が残ることは、真か偽かという二者選択を要求する問い自体の性質を問いかける。つまり、真偽の判定が《死後の恋》の何を対象とするのか、言い換えれば作中出来事としての物理性や、それを一つの物語として見る解釈や、解釈を与えている人物のあり方といった様々なレベルの何処に向けられるのかという問いが、避けて通れぬものとして見えてくるのだ。コルニコフという存在と彼をめぐる出来事の物理性は「真」であっても、彼の生を支えている物語の解釈は「偽」が疑われる。むしろ、彼自身の解釈が「偽」であることによつてのみ、その物語が「真」になり得ると言い換えてもよい。前述の解釈からいえば、コルニコフにとつての「真」は、それを共有する共同体の存在によつて保証されるはずのものである。が、この共同体に参入しようとする読者は、コルニコフの語りの表層的なレベルを「偽」とみなすことによつて、「真」なる説明を得ようとする。その意味で言葉を持った構成員たろうとするのだ。しかし、ただ自分の

話を聞いて信じればいいだけだというコルニコフから、読者は説明を要求されてはいない。コルニコフが求めるのは、説明はなくとも受け入れることで始めて成立する「真」なのである。

二者選択を要求する問い自体の性質を問い始めれば、無意識に前提としていた読者自身の規範が照らし出される。つまり真か偽という単純な態度決定には、物語のどのレベルを真偽判定の対象とするかということだけでなく、肉体的・限界性をもつ語り手による出来事の描写や判断・解釈の「不正確さ」ほどの程度まで「真」という判定に許容され得るのか、そもそも物語全体が「真」か「偽」のいずれかであるという決定が可能なのか、逆に部分的な「真」なり「偽」なりを提示することが可能でありまたそのような腑分けが要求されているといえるのか、ということに、読者自身に依拠する決定が前提となされないわけにはいかない。ここで行われた解釈はその前提において、アナスタシヤか否かという点を除く《死後の恋》の出来事としての物理的側面を主な対象とし、その合理的説明の可能をもって全体を「真」とみなそうとしたのであり、それは、語りの部分的抽出・排除による対象化と真偽判定の基準設定において読者自身の規範に依拠していることを意味する。つまりこの読者は、その（意識的な）前提である「真」という判断の決定へ可能な限り近づこうとしながら、「真」に至ることが不可能であることしか確認できず、また真偽の判定という要求自体に対する解釈のレベルにおいてコルニコフが依拠すると考える規範との衝突、そして意識的に前提した条件のうちにも無意識に依拠するものが問われることに気づく、という経験をしたことになる。

こうして回帰した冒頭において読者は再び作品からの二者選択の要求と対話することになるが、今度はもう一方の前提——《死後の恋》の物語を「偽」と判定しようとし、その作中出来事としての事実性や合理的説明を否定すること——がそれに応え得るものであるか否かを模索する道があるだろう。が、そこでもやはり真偽の判定自体に対して（作品自体は保証してくれない）自らの解釈を前提せざるを得ず、その意識的な前提が依拠する無意識の前提の存在から逃れられないことに気づくだろう。そして「偽」であるとの判定に向かう方向性には、前述したように、聞き手との同一化という困難が存在するだけでなく、コルニコフが精神異常で妄想し独り言を言っているのだとみるにせよ、コルニコフが嘘つ

きで酒代欲しさに誰彼となくつかまえては作り話を聞かせているのだとするにせよ、真偽の判定の要求自体を無化し、「偽」という判定がなされる根拠を失わせるという矛盾が待ち受けているのだ。

#### 【おわりに】

本稿は「死後の恋」が、真偽の判定をめぐって「宙ぶり」状態になるという「読者の役割」を内包していることを明らかにしようとしたものである。テクスト間に共有されるレベルにおける一ジャンルとして抽出された「幻想」を手がかりにして、自身の規範・知識を動員しながら、またそれに拘束されていることを発見しながら、作品から要求される最終的な態度決定に至れず「ためらい」続けるという歴史的な条件下にある読者のレベルでの効果に目配りすることで、異なるレベルにおける「ためらい」が要素となり、それぞれがレベルの違いを貫通して関係しあうことでお互いを持続させる、システムとしての「宙ぶり」効果が指摘できたと考える。またその場合に、仮定としての前提で、諸所の態度決定をためらいつつ乗り越えながら一貫した説明・解釈を得ようとする読書過程において、それがどのように失敗するのかについても、具体的な一例を示した。

このような「宙ぶり」効果に注目すれば、作品案内をしようとする際に、コルニコフが全てを語っているという条件を無視し、真偽の判定という枠組みをもたず、解釈者・案内者自身が読書過程で行ったはずの二者選択・態度決定の痕跡を隠したものとなるのも領けよう。<sup>\*43</sup> これからの課題としては、「死後の恋」の特異性として示せる範囲と、ジャンルとしての共有性を明らかにしていくためにも、同様の効果をもつ作品を収集・分析したいと考えている。

なお、本文中の「死後の恋」からの引用部分は《》で、その他の資料からの引用部分は「」で示し、資料等の引用箇所内の旧漢字は改めている。

【注】

- \*1 夢野久作「死後の恋」(『夢野久作全集 1』三一書房 一九六九年六月十五日発行) 九三頁
- \*2 一九二八年十月、『新青年』に発表
- \*3 前出「死後の恋」百七頁
- \*4 前出「死後の恋」百七頁
- \*5 ツヴェタン・トドロフ『幻想文学論序説』(三好郁朗訳 東京創元社 一九九九年九月十七日発行／一九七〇年発表)
- \*6 前出『幻想文学論序説』三八頁
- \*7 前出『幻想文学論序説』五一頁
- \*8 ヴォルフガング・イーザー『行為としての読書 美的作用の理論』(饗田収訳 岩波書店 一九九八年五月六日発行／一九七六年発表) 五八頁
- \*9 和田敦彦『読むということ テクストと読書の理論から』(ひつじ書房 一九九七年十月一日発行) 三三七頁
- \*10 前出『幻想文学論序説』五三〇―五四頁
- \*11 前出『幻想文学論序説』四一頁
- \*12 前出『幻想文学論序説』一二四―一二二頁
- \*13 前出「死後の恋」には、九二頁に《スエツランカヤ(浦塩の銀座通り)》、九四頁に《今年(大正五年)》、《十二露里(約三里)》という、語り手の発話とは思えない括弧付きの言いかえ・説明部分が見られる。このような説明部分が付されていること、また設定としてはロシア語で発話されているらしいこと、というテクストの問題については、考察が至っていない。
- \*14 全集については、黒白書房版が一九三六年五、七、八月に第四、六、八巻がそれぞれ刊行された後、一九六九年六月から翌年一月にかけて三一書房版(全七巻)が刊行された。黒白書房版は未確認。
- \*15 文庫については、現代教養文庫『死後の恋 夢野久作傑作選1』(一九七六年十一月三十日発行)、角川文庫『瓶詰めの地獄』(一九七七年三月三十日発行)、筑摩文庫『夢野久作全集6』(一九九二年三月二四日発行)が確認できる。単行本については未確認。
- \*16 中平亮「浦塩の月」(『東京朝日新聞』 一九一八年九月二日付け)

\*1 「夢野久作「支那米の袋」(前出『夢野久作全集 1』／『新青年』一九二九年四月発表)

\*2 このワーニヤもコルニコフ同様、主人公として登場する一人称の語り手であり、語りの信頼度の問題が生じる諸条件を備えるが、ヤングの行為の真の意味をワーニヤが誤解しているということが読者に明白な構成がとられており、また最後にワーニヤにとつての「シンジユウ」(心中)とヤングへの信頼が成就される、というテーマに関わる読者の納得が得られるオチが明白であることから、聞き手の実在感も得られ、読者は語りを信用するレベルを決定できると思われる。

\*3 「怪しき純金観音 怪外人が持廻つた露国の国宝と称する鍍金物 日本官憲より退去命令」(『東京朝日新聞』 一九一八年八月二十日付け)という記事はルーマニア国陸軍中佐が「浦塩」から来日、東京在住の英国人に対して「ロマノフ家の国宝なりと称し一尺八寸余の純金観音を持ち来り▲(ママ)数万円にて売却せんと奔走」したことを報じている。

\*4 夢野久作「書けない探偵小説」(『山羊鬚編集長(夢野久作傑作集 1)』春秋社 一九三七年四月発行)

\*5 アナスタシヤ伝説をめぐる調査・研究は九十年台に入ってから加熱し、近年映画化もされている。その先駆であるアンソニー・サマーズ、トム・マンゴールド共著『ロマノフ家の最後』(中央公論社 一九八七年八月十日発行／一九七六年発表)によると、一九一八年以降、一家のうちで最もでつちあげの対象となつたのが末娘のアナスタシヤだという。一家をかたる偽者が多く現れ、全員生存説を証明しようとするアメリカ国内の一大キャンペーンを巻き起こし、七十年代には最高潮に達した。著者の調査によると、一九一八年七月十六日頃ニコライ二世と息子のアレクセイがエカチエリンブルクで銃殺され、妻アレクサンドラと四人の娘たちは生きたままベルミに移された。少なくとも娘の一人がベルミにいたときに一時的にもせよ逃亡したことを示す証拠があり、誰かが生き残った可能性があるという。ちなみに通説ではニコライ二世と皇后、五人の子供たちは、反革命軍による奪還を恐れたソビエト権力の命令により、七月十六日にエカチエリンブルクで処刑されたことになっている。一九九一年に市郊外で発掘されたニコライ二世のものと思われる遺骨が、九八年にDNA鑑定の結果、本物であ

ると発表され、二〇〇〇年八月十四日ロシア正教会によってニコライ二世が聖人に認定されたのは記憶に新しい。

\*22 一九一八年九月、『三田文学』に発表。

\*23 魯庵生『「れげんだ・おうれあ」(『文芸春秋』一九二七年九月発行)に、キリシタン研究の好書家たちが「マダ世に知られない切支丹本が秘襲されてゐてイツかは世に出るに違ひないと信じ切つてゐた最中」のことであり、自身や猟書家として知られた和田雲郵翁が芥川に問い合わせたことでそれが架空の書物であるとわかつたこと、また当時ゴシップ種として評判になつたことが述べられている。

\*24 「智的関心」と「情的感興」は新村出(『踏絵の話』/『K・O・K』一九四七年二月発行)の用語による。新村は、自身の「南蛮」との関わりについて「智的関心から情的感興へと流れていつた」とし、木下柗太郎はその逆であるとした。この南蛮との関わり方における二つの側面は、学問的研究成果が創作活動に知識を提供し、創作の隆盛が研究論文の一般誌への掲載につながるという相乗効果をもつ反面、一人の作家、一つの作品内に共存しにくいという状況があつたといえる。

\*25 注18を参照。

\*26 青山胤通撰『日本内科学書 巻七 精神病編』(吐鳳堂 一九三四年三月発行)

\*27 『ゴゴリ』『狂人日記』(横田瑞穂訳 岩波書店 一九八三年十月発行/一八三五年発表)

\*28 『平凡社大百科事典14』(一九八五年三月二五日発行 八六八頁)から、精神病の症状としての妄想、幻覚についての一般的知識を補足しておく。主に青年期に発生し、妄想や幻覚を示す精神病の一つが精神分裂病である。症状は千差万別であるが、その中から「私」の言動を思わせるものを拾つておくと、周囲のできごとをみな自分に結びつける関係妄想、高貴な出であると確信する血統妄想、行動が他人にあやつられていると感じる作為体験、独り言や独り笑いなど。体系的な妄想観念で終始する病態はパラノイア(妄想症)と呼ばれるが、その妄想の主題には血統、発明、宗教、好訴、恋愛、嫉妬、心気、迫害が挙げられている。なお、『日本内科学書 巻七 精神病編』(前出)には『早発性痴呆』として、上記の症状の説明が既に出揃っている。

\*29 前出『日本内科学書 巻七 精神病編』

\*30 『平凡社大百科事典10』(一九八五年三月二五日発行) 六三一頁参照。

\*31 作中で言及されている『戦争が生んだ一種の精神病患者』というレッテルは、いわゆる戦争神経症を指すものと思われる。心因性つまり「その発症をその個人の感動的体験から理解することができ、原因となつた体験と症状や経過の間には関連性がある」という概念で説明される神経症は、もともと雑多な精神神経疾患の総称であり一九八五年時点においても精神病との境界線は明確でない。一九三二年九月刊行の『日本内科学書 巻六 中枢神経病』(青山胤通撰 吐鳳堂)を参照すると、昭和初期においてその区別はいつそうあいまいだつたことが推察される。「神経症ノ多クハ、大體、心因性精神病又ハコレニ近キモノト考ヘテ大過ナシ。斯クテハ、神経症ト心因性精神異常トハソノ間、何等ノ差別モナキコトアルヲ知ルベシ」。加えて『平凡社大百科事典』の戦争神経症に関する説明の中にはみられないが、『日本内科学書』において言及されているのが、虚言の要素である。「突然ニ恐ルベキ或事故ニ遭遇セル直後ニ於テコレニ基ツキテ発スル精神神経症」と定義され、特に戦時において容易にみられるという「驚愕性神経症」が「作話症」や「幻覚・妄覚」を伴うとされているのである。ちなみに『日本内科学書 巻七』(前掲)でも精神病各論に「戦闘性精神神経症」として取り上げられ、同様の説明が付されていることから、昭和初期においてある症状、例えば作話症から、一つの病名を決定することは、不毛なことだつたと考えざるを得ない。

\*32 「嘘つきのパラドックス」を考えてもいいし、ミシェル・フーコー『精神疾患とパソナリティ』(中山元訳 筑摩書房 一九九七年十二月十日発行/一九五四年発表)には以下のように説明されている。「患者は自分の異常性を認識している。患者は、その異常性にはどうしても還元できない差異があり、この差異のために、他人の意識や宇宙から隔てられているという意味を与えている。しかし患者がいかに明晰でも、自分の病について、医師のような視点をもつことはできない。患者が自己の病に対して思弁的な距離をおくことができれば、病とは自己において、自己を抜きにして進んでる客観的なプロセスであることを把握することができるのだが、患者はどうしてもこのような距離をとることができないのである。病の意識は、病の内部に捉



えられている。」(九四頁)

\*33 「登山少年 発狂」(『東京朝日新聞』 一九二八年八月四日付け)

\*34 「妻子四人を惨殺して自殺す 精神狂つた若い農夫」(『東京朝日新聞』 一九二八年八月十四日付け)

\*35 「火薬庫の衛兵 勤務中発狂」(『東京朝日新聞』 一九二八年九月五日付け)

\*36 「持てあます毒殺狂人」(『東京朝日新聞』 一九二八年九月九日付け)

\*37 「行倒れ金髪美人 狂人らしいドイツ女」(『東京朝日新聞』 一九二八年九月十三日付け)

\*38 「突然、狂人に斬られて危篤」(『東京朝日新聞』 一九二八年十月二三日付け)

\*39 松山巖「うわさの誕生」(『ユリイカ』 一九八九年一月発行)

\*40 夢野久作『ドグラ・マグラ』(松柏館書房 一九三五年一月刊行)

\*41 夢野久作「狂人は笑う」(『文学時代』 一九三二年七月発表)、「キチガイ地獄」(『改造』 一九三二年十一月発表)は、精神病院に収監されているらしい語り手(一人称の主人公)が、「死後の恋」のそれ以上に内的一貫性を欠いた語りを進めるが(そして題名が端的に示すように、彼らが異常であることを示そうとする伏線が明らかであるが)、その語りの途中で彼らはよく笑う。「私」の笑い声から始まる「死後の恋」にも、特に前半部には笑い声が多用されており類似点を指摘できる。

\*42 夢野久作「獵奇歌」(『夢野久作全集7』三一書房 一九七〇年一月三一日発行) ※狂気と天才・聖性の関わりに注目する言及は「デモクリトスやアリストテレスに確認され、またロンブローゾ『天才と狂気』(一八六四)によって医学的な側面との関わりで議論されており、日本の近代の作家の問題意識としてもこれ以前から取り入れられてきたものである。

\*43 江口雄輔「夢野久作主要作品案内」(『ユリイカ』 一九八九年一月発行)、川崎賢子「夢野久作文学博物館」(『国文学 解釈と教材の研究』 一九九一年三月二十日発行) 参照。

【付記】全集と初出の異同(漢字、仮名遣いの異同は省く)

九二頁 《売れ残っている》「売れ残つてゐた」、《スエツランカヤ》「スエツランスカヤ」、《おわかりでしょう》「おわかりになるでせう」、《酔っ払いではない》「酔つ払ひでない」

九三頁 《そうすれば》「さうして」

九四頁 《見えるでしょう》「見えますでせう」、《苦しめて》「悩まし苦しめて」、《あちらこちらと》「彼方此方と」

九五頁 《深かったかのは》「深かつたかは」、《白軍が》「私達が」、《リヤトニコフや仲間の者に》「仲間」、《たった一人シヨンポリと》「たった一人」

九六頁 《大切なものです》「大切なものなのです」、《思うであろう》「思うであろうが」

九七頁 《引つ立ててみますと》「引つ立ててみますといふと」、《名を呼んで》「名をば呼んで」、《サツクの蓋を閉じながら》「記載なし」、《突立つて》「其前に突立つて」

九九頁 《ですから》「で」、《かような身分を》「斯様な「身分を」、《それほどまでの》「それほどの」、《……で……こうしている」と考えまわした揚げ句》「さうして」

百頁 《いながら》「行きながら」、《こんな名前》「そんな名前」、《私共の》「ところで私共の」、《十四日目》「四日目」

百一頁 《闊葉樹》「闊葉」、《この森林》「此森」、《スツカリ気が》「気が」、《起つた》「起つて」

百二頁 《銃弾》「跳弾」、《モノ凄しい悲鳴》「恐ろしい悲鳴」、《知れませんでしたけど》「知れませんが」

百三頁 《宝石のことなどは》「宝石のことなどは」、《何者かに》「何者にか」、《この森の》「この森は」、《シミジミとふり返られて恐ろしく堪らなくなりましたので》「シミジミと恐ろしくふり返られて」

百四頁 《不服を》「不服も」、《森の中》「森のまん中」

百五頁 《ソロソロと》「トロトロと」、《声を立て得ず》「声も立て得ずに」、《血みどろな顔》「血みどろの顔」

百六頁 《呼ばさせて》「呼ばせて」、《察せられる》「察しられる」

百七頁 《彼女の「死後の恋」》「彼女の死後の恋」、《サアどうぞお受け取り下さい》「どうぞお受け取り下さい。どうぞ。サアどうぞ。」